瀬戸内海沿岸の町並み保全地区の現状と課題

宇高　雄志*・上村　信行*

はじめに

瀬戸内海沿岸には、歴史的な町並みを有する地域が数多く存在する。国の選定を受けた重要伝統的建造物群保存地区（以下：伝建地区）である御手洗伝建地区及び竹原伝建地区を事例に町並み保全地区の現状を把握し課題を明らかにする。

1．御手洗伝建地区

1．広島県豊田郡豊町 御手洗伝建地区

御手洗（みたらい）集落は、瀬戸内海のほぼ中央、安芸灘に浮かぶ大崎下島にある。

御手洗伝建地区は江戸時代の西回り航路の発達とともに、瀬戸内の潮待ち、風待ちの港町として発展した地域である。また、切妻造・本瓦葺の町屋が建ち並ぶ町並みには、調和とれた洋風建築も点在し、突提・雁木・高灯篭などの歴史的な港湾施設も、港町の風情をよく伝える地域である。御手洗伝建地区は、伝統的建造物群及び地割りがよく旧態を保持している理由により平成６年、国の伝建地区に選定されている。

写真１　御手洗伝建地区の町並み

この地区は、多くの瀬戸内の島々と同じように、この島も高度成長やバブル景気に影響されることなく、瀬戸内海港の風情をとどめることとなった。御手洗地区は、豊町の人々による地道な取り組みで、歴史的な景観に磨きをかけてきた。町並みは年々、江戸の風景に戻りつつある。しかし、風光明媚なミカンの島として栄えたこの島も、現在著しい過疎化と高齢化に悩まされている。町並みを歩いていて、子供や学生達を見かけることはほとんどない。近在から人を多く集めたという映画館跡や、行列が出来ていたという遊郭跡もひっそりと佇んでいる。今日も、乗客のいないバスが島を巡る。

2．豊町の人口動態・高齢化の進行

豊町の人口は3,367人（1995年：町統計）であり年々減少の傾向にある。周辺の島嶼部の人口も漸減の傾向にある。新たな人口の流入傾向でも、豊町全体でも雇用機会に限りがあるため都市圏からの若年層の流入はきわめて少ない。わずかなＵターン者も、御手洗伝建地区出身者でも豊町の中心となる大長地区へのＪターンにとどまり、御手洗伝建地区の空洞化は著しい。現在、御手洗地区の若年層はきわめて少なく、20歳以下は10人を切っている。

一方で豊町の高齢化は急速に進行している。高齢化率は39％（1995年）であり、豊町の生産年齢人口は53％と地域の産業振興は困難な状況にある。また御手洗伝建地区の住民の約50％が高齢者であり、町内他地区との平均よりもさらに上回る。これらの影響もあり、伝建地区内の空き家率は高い。調査時には伝建地区内の戸数の内、

*広島大学大学院工学研究科建築計画学講座

約30%が空き家と認定できる。長期不在などを含めると、実数はより多くなる。空き屋の所有者も、家屋への憧憬や近所への気兼ねもあり、売却や貸し出しは簡単ではない。

また住民が主体となって維持管理してきた祭礼等の継続も危ぶまれ、また消防団の高齢化により地域防災の維持が困難になっている。

・高齢化が進行している39%(65才以上)
・過疎化が進行している
・人口49%減(1970−1995)
・低所得の水準にある
・72%(年間所得の県民平均比)
・遠隔性が最大である
・県内で最も遠隔性が高い離島
＝いずれもが広島県内の自治体中の最低水準

豊町1997『豊地域活性化調査報告書』より抜粋

3.空き屋化・高齢化のすすむ全国の伝建

この現象は御手洗伝建地区だけのものではない。私たちの研究グループの調査によると、全国の伝建地区での空き屋率の増加は急激に進んでいる。1998年に全国の伝建地区50カ所に向けて行ったアンケート調査(有効回答33地点)では、実に15伝建地区ですでに空き屋率が10%を超え、3カ所で30%を越している。これに、独居老人世帯や高齢者世帯などの、「空き屋予備群」を加算すると、大半の伝建地区で20%を超え、最も高い伝建地区では約半数が、空き屋と高齢者世帯で占められている。

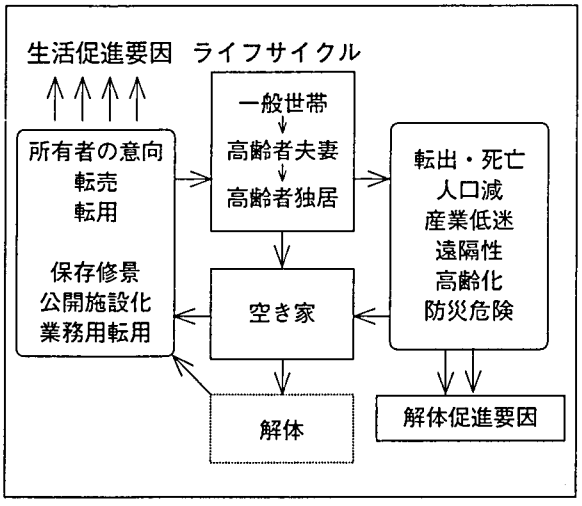

図1　高齢化・空家発生の関係

私たちの聞き取りの結果では、伝建の修理事業の際に一時的にでも転居した世帯が戻らないケースや、むしろ伝建空き屋について率先して修理が行われるケースが少なくないという。

4.高齢化社会のまちづくり

こうした状況下でも、御手洗伝建地区には、伝建地区指定に前後して、地区住民を主な構成員にした「保存会」が発足している。

保存会発足は御手洗伝建地区で進行する、高齢化などによる地域活力の低下を危惧し地域の活性化を目指し、豊町全体の観光振興の場としての御手洗伝建地区の町づくりを目指したのである。

保存会の主な取り組みとしては「ボランティアガイド」での外来者への案内や、離島立地を生かした観光企画「のんびり島巡りツアー」に企画運営に参加するなど、広範囲な分野で活動している。そのいずれもで、保存会のメンバーの素朴な人情やそこで育まれる交流経験が好評を博している。御手洗伝建地区は従来より、瀬戸内沿海の遊好の地として栄えた。そのため客あしらいになれていることが、このような外来者との活動が、保存会の高齢者にも無理なく受け入れられる要因と考えられている。

豊町の高齢者は概して勤労奉仕精神が旺盛で、このような自主的活動へも前向きに参加し「老人会」などとの協同の元、積極的な活動を展開している。多くの地域社会が高齢化による地域活力の低下に悩む中、伝建地区における保存ボランティアとして、地域の伝統や伝承芸能に造詣の深い高齢者の人材活用による活躍は、高齢化社会を迎える地域社会の明るい側面となっている。

もちろん「保存会」の活動は日常的な生活空間である御手洗伝建地区を再発見しその価値を再認識する機会となっている。「保存会」の活動を通じた、わが町意識の醸成に結び付いていると参加者は高く評価している。一方で、こうした、積極

的なまちづくりへの参加が「まちの人々の個々のビジネスのやる気に結び付いている」と「保存会」の活動の波及効果も評価している。しかし、伝建地区指定以降で保存活動もマンネリ化し「ガイドしていてもこれといった見せ場がないので苦労する。ガイドの本拠となる町並み観光センターがほしい」と「保存会」の活動の上での拠点の設置を求められるなど、町並み保存へ向けた次のステップが求められている。

しかし、こうした活発な地域の市民の参加も、危険回避への対策や活動保険制度などの補償制度は充分ではなく、参加者の傷害補償制度の充実などへの助成や対策が求められている。

5.高齢化の進む伝建地区の防災

伝建地区の抱える問題に「防災」がある。御手洗集落は伝建選定直前の平成3年に記録的な被害を及ぼした「19号台風」に直撃されている。また、先述のように消防団の高齢化は著しく、災害への態勢は非常に脆弱であるかに見える。

しかし「19号台風」罹災時において、家屋や道路などが著しい破壊を被ったにも関わらず、高齢者を主体とする生活者に被害はなかった。いち早く、高齢者同士が相互の援助を行い、非難行動がとれたためである。安否の確認が消防団や役場等よりも、近隣のコミュニティがいち早く実施している。このように物的被害が大きいにも関わらず、人的被害を最小に留めたことは、高齢者自身の災害への経験や、非難活動での適切な助け合いが効果を生んでいる。

このように高齢化が進めば、個人差はあるが高齢者の自助的能力に頼らなくては、地域社会は充分に機能できなくなる。つまりは高齢者の能力を適切に評価し、日常のまちづくり活動から、災害などの非常時まではばひろく対応することがこれからのまちづくりには欠かせないものになりうる。

6.伝建家屋とバリヤーフリー

1998年に行った伝建家屋の世帯アンケートによると、伝建家屋に対する不満は「日当たり」「建具のたてつけ」「間取り」「夏の暑さ」の順で多くなっている。これらは立地条件や地理的条件などの外部からの要因で生じるばかりでなく、日本家屋の特徴や家屋の老朽化から生じていると考えられる。

しかし、高齢者が多く居住している割には、バリヤーフリー性能に対する不満は聞こえてこない。また、本来整備すべき街路や公共施設のバリヤーフリーへの要求も低い。インタビューでは、多くの高齢者が「子供の頃からの生活空間なので怪我をするわけがない」と述べ、伝建地区の生活空間は既に身体の延長として認識されていることを挙げる。逆には高齢者が都市部に転居すると不具合が発生すると言う。

住みこなしの前提としての改造　何十年も住み続けた生活空間への「慣れ」があり、地区内の人がほとんど顔見知りであり、M地区が比較的ひとつにまとまった独立した集落でコミュニティが既に形成されているという地理的、歴史的な背景があることも理由と言える。

M地区では長く住み続けるために繰り返し改築されているケースが多い。それは時間の経過とともに生活領域、生活様式と家族形態の変化に適切に対応してきた。これが伝統的な住まいに住み続ける秘訣となっている。「19号台風」は前代未聞の被害であったため、大きな被害をもたらしたが、それを契機に修復を行ったことが現在でも高齢者が住み続けられる要因になっているようだ。伝建家屋の問題点としては、伝建家屋の老朽化、また構造的な問題が挙げられるが、これらは段階的な改築等の工夫により日常生活での支障を減らせるといえる。

伝建制度ではデザインのみの修理・修景に留まり、住民が期待したような防災に対しての構造的な改築へは補助がでず、ファサードの保存に留まっている。

7.伝建地区のあたらしい「生活景」にむけて

どの伝建地区をとっても近年の高齢化と空き屋の増加は著しい。本稿で取り上げた御手洗伝建地区の場合、高齢者を中心とした生活者のしなやかな対応でもって、自らの生活環境の維持からまち

づくりに対応している。その意味で、御手洗伝建地区の「生活景」は、保存修景事業の結果、地域住民に与えられたのではない。生活者が災害や高齢化、過疎化の現実を乗こえて創造的に「生活景」への働きかけの成果なのである。その意味で今までの軌跡を十分に評価しつつ、まちづくりを進めるべきである。

しかし、御手洗伝建地区を取り巻く厳しい現実をみるにつけ、これからの取り組みが、今までのような取り組みの形態で乗り越えられるかは疑問が残る。これまでの、10年間の島嶼社会の変化と、これからの10年とでは起こりうる問題の質と深刻さが異なるのである。伝建地区の風情は、高齢者の暮らしを支える上で非常に「絵」になる生活景だとおもう。今後の、まちづくりにおけるシナリオメーキングには、しっかりと高齢化の現実を受け止め保証する仕掛け作りが求められるように思える。

(注記)

本稿は、既論文、宇高雄志「超高齢化社会の「生活景」はどうつくる？　伝建地区の保全と高齢化、空き屋増加を巡って」日本建築学会大会（東北）農村計画・都市計画研究協議会2000.09の一部に調査過程での知見を加え、再編したものである。

(主要参考文献・一覧)

(1) 西山徳明、三村浩史『伝統的建造物群保存地区における景観管理計画に関する研究　白川村荻町合掌集落を事例として』日本建築学会計画系論文集　NO.474　P.133　1995年8月

(2) 葉　華、浅野　聡、吉田雄史、戸沼幸市『伝統的建造物群保存地区を核とした歴史的景観の保全・形成のための地区指定の現状と変化に関する研究』日本建築学会計画系論文集　NO.506　P.111　1998年4月

(3) 牛谷直子、明智圭子、増井正哉、上野邦一『重要伝統的建造物群保存地区における修景実態に関する研究、日本建築学会計画系論文集』NO.561　P.211　2002年11月

(4) Malone- Lee Lai Choo 1999 "Heritage and Planning", "Our Place in Time" Singapore Heritage Society

(5) Peter J. Larkham, 1996, Conservation and the City, Routledge

(6) Yushi Utaka, 1997, New Agendas of Japanese Heritage Conservation - Aging, Vacancy, disaster and Tourism, Proceedings of Asian Real Estate Society in Taipei

II. 竹原伝建地区

1. 竹原市竹原伝建地区

竹原伝建地区は、回船や酒造で繁栄した商家町である。地区内には、江戸時代後期の町並みのほぼ全域にわたって残っており、大半が江戸時代中期から明治時代に建てられた本瓦葺・塗屋造の重厚な町家が連続する町並がある。数寄屋造の優れた意匠の座敷と庭園をもつ家も多い。伝建地区の中央を貫く通り沿いには主屋、座敷、蔵を連ねた多棟連結型の町屋が多く、独立型町屋や妻入りの町屋もその周辺に点在している。横丁には、屋敷型の町屋や長屋も多く残っており、性格の異なった社寺建築なども江戸時代の形のまま今に伝えられている。

竹原伝建地区が存在する竹原市は、人口約33,000人の広島県中央部の瀬戸内海に面した小都市である。通称「安芸の小京都」とも呼ばれ、竹原伝建地区を含め、歴史的な建造物が数多く存在している地域でもある。竹原伝建地区の主な概要を表1に示す。

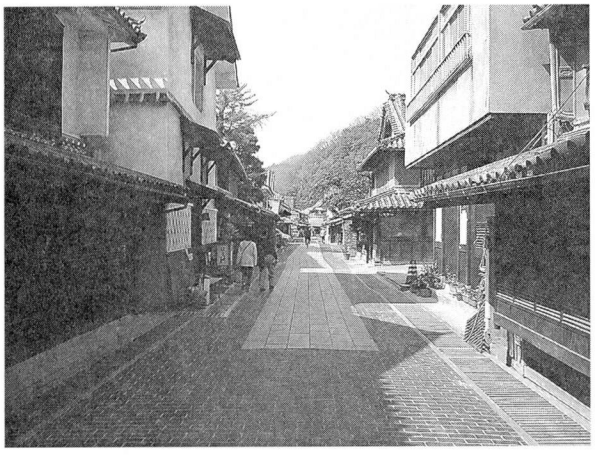

写真2　竹原伝建地区の町並み

表1　竹原伝建地区の主な概要

保存指定建造物数	：96物件
工作物	：18物件
面積	：約5.0ha
伝建地区の指定	：昭和57年4月
国選定による伝建地区指定	：昭和57年12月
伝建地区の年間観光客数	：35万人

2. 竹原伝建地区の町並み保存整備について

2-1）竹原伝建地区の環境保全整備の状況

昭和57年の伝建地区の指定より、指定建築物の修理・修景以外にも数多くの周辺環境整備を行い伝建地区の内外の景観を保つている。伝建地区指定後から現在まで20年が経過しており、下水道整備を除く、基本的な周辺環境の保全整備は概ね完了しているのが現状である（表2）。その結果、年間35万人もの観光客が訪れる中国地方屈指の歴史的町並みを有する地域となった。

表2　竹原伝建地区内の周辺整備の実績

：町並み保存センターの設立（昭和56年）
：民俗資料館の設立
：修景広場による環境整備
：町並み観光用駐車場の整備
：メイン通りの黒レンガと石貼りによる舗装改良整備
：主要通りの電柱移設による修景（昭和58年）
：JR駅より歴史的街区へ導く景観シンボル道路として街路樹に竹原市のシンボルである木（竹）の植栽
：歴史的街区へ導く歩道での伝建地区内と同様の素材の使用

2-2）伝建区選定後20年を経ての評価

伝建地区選定後20年が経過し、伝建地区内の保存指定建物の修理は大部分が終了し、修景された建物も数多存在する。この制度により町並みの景観を保つ整備は20年間で一定の成果を上げ、今後も町並みを形成する建築物の修理・修景整備は継続されていくと思われる。

地区内居住者は、伝建地区選定後20年が経過し生活環境及び周辺環境についてどのようなことを感じているのであろうか？

平成14年度に広島大学と県立広島女子大学との共同により実施された、聞き取り調査と地区内住民に対して行った「住宅環境と周辺環境に関するアンケート調査」の結果を分析し、その評価をお

こなった。本稿では、特に周辺環境の評価に関して分析を行うものとする。ここで言う周辺環境の評価とは、道路及び下水整備等のハード面の整備状況に対する評価と地区住民間の結びつきの状況や町並みに対しての満足度等のソフト面で評価を含んだものとしている。

アンケート調査の概要

アンケート名称：「竹原町並み保存地区の住まいと環境に関するアンケート」
調査対象：竹原伝建地区内の居住世帯
調査期間：平成14年10月18日～10月28日
配票回収状況：
配布：88票　回収：67票　拒否：21票
調査実施者：広島大学・県立広島女子大学

3. 周辺環境についての住民の評価

3-1）伝建地区の魅力について

地区住民が伝建地区の周辺環境について満足している点で最も多いのは、「地区全体が静かである(52.2%)」という項目である。不満である点の「騒音が気になる(3.0%)」の項目と比べてみても竹原地区は静かであるという評価が得られている。地区内は高齢化率も高く高齢者が好む静かな環境であることへの満足度は高い。これは、地区住民を対象とした聞き取り調査でも同様の結果を得ている。

また、「町並み景観が美しい(31.1%)」「修景広場が町並みと調和している(19.4%)」といった町並みのある景観について満足度が高い結果となっている。伝建地区に指定後20年を経た現在、地区内の住民はこの町並みを美しいと感じ満足しているのである。

竹原伝建地区は旧市街地の中心部に位置している。したがって主要な施設にも徒歩でいけるために「交通や買い物などの生活の便がよい(41.8%)」「交通や買い物の便が良くない(4.5%)」と地理的な利便性の評価も高い。

竹原伝建地区は、静かで町並みがキレイな便利な地域であると住民は評価しているのである。

3-2）インフラ整備について

インフラ整備の不満足点では「公共下水が引かれていない(47.8%)」ことを多くの住民が指摘している。非水洗式のトイレが不衛生であることへの不満も住民は感じているようである。

中心市街地でありながら、未だに公共下水が完備されていな理由としていくつかの要因が考えられる。竹原伝建地区の伝統的な家屋は、ほぼ全戸が前面の道路に居住空間が面した構造を持っている。したがって、トイレを含む水周りが家屋の奥側に位置しているのが一般的である。その部分まで下水管を配管する場合、一般住宅に下水管を引き込む場合とくらべて作業が複雑になる。また、負担する経費も割高になると予想される。地区内の路面は、下水本管の埋設工事が未だ完了していないにもかかわらず、路面を黒レンガと石張りによる舗装改良工事が既に行われており、今ではこの整備されて路面が竹原の町並みを形成する要素の一部となっている。そのような諸事情もあいまって公共下水の導入が遅れているものと思われる。

下水の引き込み以外の項目では、「歩行者が安心して歩ける(22.3%)」といった点でも評価が高い。ただ、自動車を運転する側にとっては歴史的な町並みを有する地域特有の狭小な道路による「道路が狭いので運転がしづらい(29.9%)」といった不満もある。また、「交通事故の危険性がある(13.4%)」といった危険性についても地区住民は指摘している。

3-3）地区住民間の結びつきについて

伝建地区の指定範囲は自治会等の行政区分の指定範囲とは直接一致しない。いくつかの行政区域にまたがって伝建地区は指定されている。しかしながら、近所付き合いに関しては、歴史のある中心市街地であるために、祭りなどの地域の恒例行事への参加者は多い。また、葬式などの緊急な事態に対しても地域住民が結束して対応する習慣がいまも存在する。したがって、地区内住民間の結びつきは今も強いと言える。「近所付き合いが良

好だ(43.3%)」「近所付き合いがうまくいかない(7.5%)」といった結果にそのことがよく表れている。ただ、「自治会の活動が良好だ(14.9%)」「自治会の活動が充実していない(10.4%)」といった自治会活動に関した評価が低い。また、保存会については「保存会の活動が充実している(11.9%)」と低い評価となっている。高齢者の増加と空家の所有者が地区内に住んでいないために、行事等に参加できる人数も年々減少する傾向にあり、住民間の結びつきは年々希薄になってきているといった意見もある。

3-4) 景観の維持について

地区のもつ景観に関しては、「町並み景観が美しい(31.1%)」といった結果が得られている。ゴミ収集等の生活者の日常行為が結果的に景観を疎外することにつながっているとして「ゴミの収集の際にゴミが目立ち過ぎる(16.4%)」を不満点として上げられて住民もいる。観光客の目に触れないようにゴミの収集時間を早朝にするなど対策が必要であるといった意見も聞かれた。地区内住民の町並みを維持していく上での意識の高さがうかがえる。また、「部分的にまだ景観の良くないところがある(22.4%)」と現状の町並み保全状況には満足していない地区住民の意識も感じ取れる。

一方、「路上駐車が多く町並みの景観を阻害している(34.4%)」と感じている住民も多く存在する。町並みの景観を保全する上で路上駐車が景観を損ねていると感じている住民が多いことが伺える。

歴史的な町並みを有する地域特有の駐車スペース不足による路上駐車は、ここ竹原伝建地区でも大きな問題となっている。竹原伝建地区の場合、高齢者や独居老人が比較的多いために駐車場スペースの必要性はそれほど強く感じられない。しかしながら、商業者、子供をもつ世帯、若者などは、住居に近い駐車スペースを強く要望している。しかしながら、地区内には駐車場が限られているために、やむを得ず住宅前の路上に違法駐車する傾向にある。

伝建地区内での駐車場確保は、今後若い世代の定住を考える上で重要な問題であると思われる。

表3　周辺環境における満足な点(複数回答)

満足な点	%
地区全体が静かで良い	52.2%
近所付き合いが良好だ	43.3%
交通や買い物などの生活の便が良い	41.8%
全体的な町並み景観が美しい	31.3%
観光客が多いので賑わいがある	28.4%
歩行者が安全にあるける	22.3%
修景広場が町並みと調和している	19.4%
防火体制が整っている	19.4%
全体に防火意識が高い	17.9%
自治会の活動が良好だ	14.9%
観光客が来るので活性化される	14.9%
保存会の活動が充実している	11.9%
修景広場が気に入っているのでよく利用する	4.5%
特になし	1.5%
不明	16.4%

表4　周辺環境における不満な点(複数回答)

不満足な点	%
公共下水道が引かれていない	47.8%
路上駐車が多く町並みを阻害している	34.3%
道路が狭いので自動車の運転がしづらい	29.9%
部分的にまだ景観の良くないところがある。	22.4%
ごみ収集の際のゴミが目立ちすぎる	16.4%
保存会の活動が充実していない	14.9%
交通事故の危険がある	13.4%
自治会の活動が充実していない	10.4%
防火体制が整っていない	10.4%
全体的に防火意識が低い	9.0%
近所付き合いがうまくいかない	7.5%
観光客が多いのでいろいろな問題が発生	7.5%
交通や買い物などの生活の便が良くない	4.5%
修景広場が町並みと調和していない	3.0%
修景広場が利用しづらい	3.0%
騒音が気になる	3.0%
不明	22.4%

3-5）防災について

全国の町並み保全地区が木造建築物の周密する地域に数多く位置していることもあり、町並みを維持管理していく上でも防災に関する取り組みは非常に重要である。秋田県角館伝建地区などのように消防ホース等の消化設備を充実させている伝建地区も全国には数多く存在する。しかしながら、竹原伝建地区内にはそのような設備は、今のところ存在しない。

竹原伝建地区が木造建築物が密集する地区にあり、地区外周辺も同様に木造住宅が多く存在している。その中にあって地区内住民は、防災について「防災体制が整っている。(19.4%)」「全体の防火意識が高い(17.9%)」と木造建築物が密集する地区としては防災に関する意識はそれほど高いとはいえない。町並み保全地区がこれまで大火にあったことが無いことと、保存地区を含むこの地域で防火訓練は頻繁に行われているこのことから「防火体制が整っていない(10.4%)」「防火意識が低い(9.0%)」といった防災に関する点で地域住民の意識はそれほど高くない。

3-6）観光客への対応について

竹原伝建地区には、毎年35万人もの観光客が訪れる。地区内の住民は観光客に対しては「観光客が多いので賑わいがある。(28.4%)」「観光客が来るので地域が活性化される。(14.9%)」と概ね肯定的な意向のようである。

高齢化が進み、活気のない町に適度の数の観光客が訪れることに対して不満を抱いている住民は少ない様である。「観光客が多いのでいろいろな問題が発生している(7.5%)」といった観光客による弊害はそれほど指摘されていない。しかしながら、一方では一般住宅を公開施設と勘違いをして住居内に無断で入り込む事例も報告されている。

今後、観光客が増加した場合に、地域住民が観光客に対してどのような対応を見せるのか注目したい。

4.高齢化と後継者不足・空家の増加

全国の伝建地区の同様であるように、竹原伝建地区も居住者の高齢化は進んでいる。今回のアンケート調査の結果、調査対象者の56%が60歳代、70歳代であった。居住者の半数以上が高齢者である。

表5　竹原伝建地区の空き家の実態

調査対象世帯：109物件 空家：29物件 空家率：26% (なお本調査による空家の定義は、週末及び年末年始だけの数日間の滞在、いわゆる留守宅も空屋に属するものとする。) 公共施設・公開施設：7軒　店舗：7軒

地区内の留守宅を含めた空家は29物件であった。調査対象とした戸数が109物件であることから空家率は、26%にも達している。竹原で伝建地区の4軒に1軒は空家であることになる。その空家の大部分は、比較的床面積は狭い小規模な町屋が多いのが竹原伝建地区内の空家の特徴である。床面積も小さく、賃貸にもあまり適してしまい小規模な町屋が空き家となっている。

60歳代以上の居住者が56%もいる現状を考えると今後は益々地区内には空家が増加すると思われる。後継者及び相続者への定住の推進や第三者への賃貸等による空家を活用できる仕組み作りが急務である。

参考文献：

(1)　竹原市伝統的建造物群保存地区関係例集
(竹原市教育委員会)
(2)　竹原市伝統的建造物群保存地区調査報告書
(昭和54年3月　竹原市)

注記：

本稿は、既論文1）上村信行「歴史的市街地における伝統的風土の保全と地域振興その13伝建地区における修理・修景事業と建築生産組織(T伝建地区を中心に)」日本建築学会中国支部報告集(第23巻)　P605-P608　平成12年3月と既論文2）上村信行「歴史的市街地における伝統的風土の保全と地域振興その21伝建地区における修理・修景システムに関する研究」日本建築学会中国支部報告集(第24巻)　P807-P810　平成13年3月の一部に平成14年に広島大学と県立広島女子大学が共同で行ったアンケート調査での分析を加え、再編したものである。

（主要参考文献・一覧）

(1) 西山徳明、三村浩史『伝統的建造物群保存地区における景観管理計画に関する研究　白川村荻町合掌集落を事例として』日本建築学会計画系論文集　NO.474 P.133　1995年8月

(2) 葉　　華、浅野　聡、吉田雄史、戸沼幸市『伝統的建造物群保存地区を核とした歴史的景観の保全・形成のための地区指定の現状と変化に関する研究』日本建築学会計画系論文集　NO.506　P.111　1998年4月

(3) 牛谷直子、明智圭子、増井正哉、上野邦一『重要伝統的建造物群保存地区における修景実態に関する研究、日本建築学会計画系論文集』NO.561 P.211　2002年11月